

V 付 章

1. 北海道の庭園樹種

史跡旧ヨイチ運上家庭園は、北海道の南部（余市）にあって石狩湾に面している。

庭園遺跡の復原整備は、当然のことながら発掘成果・文献資料等にもとづき、できるだけ同じ意匠、材料で当初の姿に忠実に復原しなければならない。庭園構成材料のうち、植栽樹木等については生物体である以上、植栽した物が現在まで生きつづける例はきわめて少なく、まして一度生命を終えると、その遺存体（幹、枝、葉、実）はほとんど残存しない。当遺跡の発掘調査でも、この例にもれず当時の植栽樹種の手がかりとなる植物遺存体は出土しなかった。次に、当遺跡のように明治時代に作庭された庭園ならば文献・写真等の資料が残されている場合もあって、これらから庭園植栽樹木を知ることもしできる。当遺跡の場合も、数枚の写真が残されていたが、庭園のごく一部しか写っておらず、庭園の周囲にどのような樹木が植栽されていたかは不明である。

そこで、当遺跡の復原整備にあたって、庭園の植栽樹種についての選択・決定はどのようにして行なったら良いか考えなければならない。まず最初に、遺跡地周辺の潜在自然植生、並びに現存植生を調べ、これをもとに庭園にふさわしい樹種をある程度絞ることができる。もし、このことを考慮しないで植栽樹種の決定をしたならば、せっかく植えた樹木が自然環境に適応できなくて枯死したり、植付後の維持管理に多大な経費と労力を費やすことになりかねない。そこでまず、北海道の植生を概観してみよう。

北海道の植生は、気候による植物帯の水平分布でいうと、大きくは道南と道北に分かれる。道南部は、ハルニレ、ミズナラ、イタヤカエデ、ヤチダモ、ナナカマド、シイノキ、ウダイカンバ、ハリギリ、ハウノキ、カツラ、オヒョウ、アサダ、クルミ属などの落葉広葉樹と、エドマツ、トドマツなどの亜寒帯性の針葉樹とが混交している。一方、道北部はエゾマツ、トドマツ、アカエゾマツなどの針葉樹とダケカンバが分布している。このように北海道の樹木は、本州、四国、九州にくらべ、種類も少なく、植栽樹種も限定される。

次に発掘調査以前の庭園の現生樹は、イチョウ、ハルニレ、イタヤカエデ、イヌエンジュ、クルミ属、サクラ属、ヤマグワ、ニワトコなどの落葉広葉樹と針葉樹のイチイがあった。各樹木とも、胸高直径から推して作庭当初の樹木とは判断できなかった。

以上のことから、当遺跡に植栽される樹木の決定にあたっては、当然のことながら、樹形、花、実、葉の色などの美しい物、また周辺の植生との調和、対比等が得られる樹種を選択していかねばならない。同時に植栽される樹木がはたしてその土壌条件に適合しているかどうか配慮されねばならない。このようなことをふまえて決定した樹種は、主としてイチイを用い、これにハルニレ、イヌエンジュをまぜ、ドウダンツツジ、イヌツゲ、エゾヤマツツジ、ハマナス等を加えた。最後に、当遺跡では試みなかったが、北海道で当時もてはやされた庭樹や草花があったならば、これらを植栽することも一方で考えられる。